日本医史学雑誌　第59巻第3号（2013）　379–389

マラリア予防教育映画「翼もつ熱病」とその変遷
――第二次世界大戦後の彦根市におけるマラリア対策――

田中　誠二[1)]，杉田　　聡[2)]，丸井　英二[3)]

[1)] 新潟大学人文社会・教育科学系
[2)] 大分大学医学部看護学科
[3)] 人間総合科学大学人間科学部

受付：平成24年12月25日／受理：平成25年5月12日

要旨：第二次大戦後，滋賀県彦根市は土着マラリア（おこり）対策に取り組んだ．映画「翼もつ熱病」は，市民を対象とするマラリア予防教育の教材として，彦根市衛生課および彦根マラリア研究所が共同で製作した視覚教材である．本稿では，彦根市立図書館書庫より発見された本映画フィルムを復刻（DVD化）し，内容の構成とその特徴を検討した．その結果，映画の内容は大きく「1）始まり（導入）」，「2）学術的内容」，「3）対策の実施」，「4）終わり（まとめ）」の4部で構成されていた．本映画は，小林弘（彦根市衛生課長）によってのちに数度の再編集が施され，「教育映画」から「記録映画」へと性格を変容していった．また，本対策は占領軍との関係のなかで進められた側面をもつが再編集によって占領軍の存在は「記録」から削除された．マラリア撲滅が市の功績であることを前面に押し出す意図があったものと推測される．

キーワード：土着マラリア，マラリア撲滅運動，衛生教育，教育映画

Ⅰ．緒　言

マラリア（Malaria）といえば「熱帯病」という印象が強い．確かに，世界のマラリア罹患者の大半はアフリカや東南アジアを中心とする熱帯・亜熱帯地方で広く発生している[1)]．しかし，わが国（日本内地）にもかつて，北は北海道，南は九州に至るまで土着性のマラリア（indigenous malaria）が存在した[2)]．第二次世界大戦後まで土着マラリアの発生が残った滋賀県彦根市では，まちを挙げてマラリア対策に取り組み，対策開始後わずか6年で撲滅を成し遂げた歴史をもつ[3)]．

彦根市のマラリア対策は，終戦後わが国に進駐した占領軍の勧告を契機に，1949（昭24）年1月に開始されたものである．マラリア患者の発見・治療（対原虫対策）から媒介蚊*Anopheles*の発生源をなくす環境整備（対蚊対策）に至るまで包括的に推進され，その一環として彦根城を取り巻く三重の濠のうち外濠は埋め立てられた（したがって，現在その形跡を確認することはほとんどできない）．また，「彦根市マラリア予防条例」の制定や「彦根マラリア研究所」の設立など，ユニークかつ大胆な取り組みによって，1954（昭29）年，ついにマラリアの撲滅を成し遂げたのである．行政主導で始まった彦根市のマラリア対策は，その後，住民・専門家（研究者）を巻き込んだ“まちぐるみ”の活動へと発展し，いわゆる社会運動としての側面を帯びた点に1つの特徴がある[3)]．今から60年以上前の「歴史的」経験であるが，今日のヘルスプロモーション活動の“模範”ともなる要素が多くちりばめられた「現代的」な課題として，その検証には重要な意味がある．

著者らは，本対策の実態解明を目指すなかで「翼もつ熱病」というタイトルが付された16ミリ

映画フィルムを発見した．この映画は当時，彦根市民を対象とするマラリア予防教育に活用された視覚教材である．彦根の人びとは，どのような映像を観てマラリア（予防）に関する知識を獲得し，実践したのだろうか．本映画は彦根市で取り組まれた衛生教育の一端に触れることのできる貴重な一次資料である．本稿では，彦根市がマラリア予防教育に活用した映画「翼もつ熱病」の概要を明らかにし，その特徴を検討したので報告する．

Ⅱ．材料と方法

1．対象とした資料：映画フィルム「翼もつ熱病」（彦根市立図書館所蔵）

映画「翼もつ熱病」（以下，「翼もつ熱病」と略すことがある）のフィルムは，彦根市立図書館書庫より木箱に収められた状態で発見された[4]．フィルムは374メートル（1,225フィート）から成り，収録時間は16コマ／秒再生で約51分である．音声は入っていない．白黒フィルムであるが，部分的にステンシル技法を用いた着色（手法による）が確認された．フィルムの保存状態は悪く，汚れや映写キズ（映写途中で停止したために発生した焼け跡），カビなどが確認され映写が困難であった．フィルムの保護と反復視聴を行う利用上の便宜から専門業者に復刻を依頼しDVDへの変換を完了した．分析にはすべてこのDVDを使用した．

2．検討の方法

「翼もつ熱病」の内容の構成とその特徴を検討した．その際，第二次大戦時およびその前後の時代を対象に映画史料研究を進めた阿部の大著「人間形成と学習環境に関する映画史料情報集成」（風間書房，1993年）[5]における分析の手続き，手順を参考に「場面展開表」を作成し，それをもとに構成の概略を把握した．

場面展開表は，1）内容構成上ひとまとまりとなる場面ごとに区切り順番に番号を付した「シーンNo.」，2）各シーン開始時の経過時間を記録した「経過時間」，3）映像中に示された字幕などの「文字情報」，4）登場人物の行動・表情・しぐさ，背景にある風物・事物，その場の雰囲気・気配・傾向などを適宜拾い記載した「映像情報（場面描写）」から構成される[6]．必要に応じて，キー・シーンとなる箇所を静止画像として保存し（スクリーン・キャプチャー），内容構成の検討，説明に用いた．

本映画に関する周辺の情報は，小林弘著「彦根のマラリア對策」（彦根市衛生課，1952年），同著「彦根市に於けるマラリア防遏」（私家版，1960年）を中心とする文献資料，地元新聞記事，市広報などの文書記録から収集し，記述を整理することで検討材料として用いた．小林弘（こばやしひろむ：1916–1991年）は，彦根市衛生課長兼彦根マラリア研究所長として対策の指揮を執った医師であり，父で市長の小林郁（こばやしかおる：1888–1974年）と共に彦根市のマラリア対策をリードした中心人物である[3]．

Ⅲ．結果：映画「翼もつ熱病」の背景と内容の構成

映画「翼もつ熱病」は，彦根市のマラリア対策において中心的な役割を担った彦根マラリア研究所と彦根市衛生課が共同で製作した“自主製作映画”である．1949（昭24）年5月から約1年間を費やし完成した本映画は，撮影や編集など現像の作業以外すべて映画製作の経験がない研究所員，衛生課職員によって取り組まれた[7]．

「翼もつ熱病」の映像には字幕による明確な章立てがなされていないが，その内容から大きく「1．始まり（導入）」，「2．学術的内容」，「3．対策の実施」，「4．終わり（まとめ）」の4部で構成されていた（図1）．各章の概略は以下の通りである．（なお，経過時間の標記は「○○分○○秒」を意味し，説明する映像が映し出された最初の時間を記録した．）

1）始まり（導入）（00分00秒～02分00秒）

「この映画をすべての人々におくる」（00:15）というメッセージで幕を開ける本章は，全体の導入部にあたる．映画タイトルである「翼もつ熱病」という文字が記された扉がゆっくりと開かれ

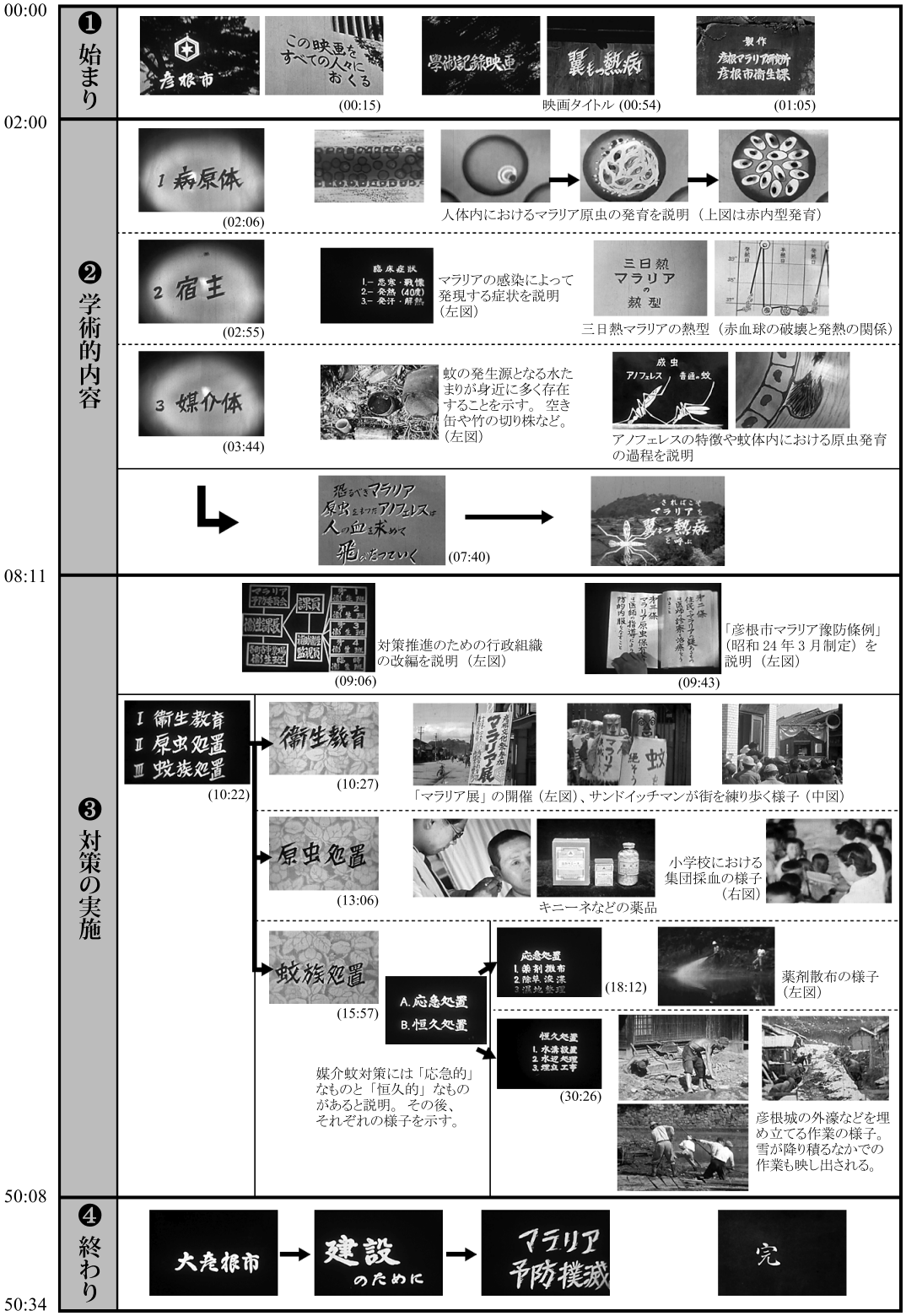

図1　映画「翼もつ熱病」の内容構成

（00:54），その後，映画の製作に係わった組織や人物の名前が次々と示されていく．文字情報によれば，本映画は「彦根マラリア研究所」と「彦根市衛生課」によって製作され（01:05），企画・撮影・編集には小林弘氏ほか衛生課員2名の名が記されていた．また，本章の最後には，「学術指導」として彦根マラリア研究所顧問であった森下薫氏（当時，大阪大学微生物病研究所教授）[8] の名前が記されていた（01:46）．

2）学術的内容（02:00～08:11）

本章は，マラリアに関する基礎的な知識を「1 病原体」，「2 宿主」，「3 媒介体」という流れでそれぞれ解説しており，本映画全体のなかでも教育的な色彩が強い内容が収録されている．「1 病原体」に関する箇所（02:06）では，人間の血液（赤血球）のなかでマラリア原虫（*Plasmodium* spp.）が分裂を繰り返し，発育した原虫が別の赤血球内に侵入する様子を解説した（赤内型発育）．前述の通り，本映画は白黒映画であるが，ここで使用した図の血液や原虫は赤く着色されていた．「2 宿主」に関する箇所（02:55）では，マラリア感染により発現する症状を解説しており（「1. 悪寒・戦慄，2. 発熱（40度），3. 発汗・解熱」），特に彦根で流行する土着マラリアの大部分を占めた「三日熱マラリア」を取り上げ，48時間毎に熱発作を繰り返す典型的な熱型をグラフで示した．「3 媒介体」に関する箇所（03:44）では，まず彦根城を取り巻く濠や墓石の花筒，竹の切り株，空き缶，下水溝などの水たまりを映し出し，マラリアを媒介するハマダラカ属 *Anopheles* の蚊の発生源がまちの至る所に存在することを示した．その上で，アノフェレスの形態や特徴を他の蚊属と比較しながら表現している．また，患者を吸血したアノフェレスの体内で雄性生殖体（microgamete）と雌性生殖体（macrogamete）が合体受精して融合体（zygote）となる様子や，中腸壁の外側に形成されたオーシスト（oocyst）からスポロゾイト（sporozoite）が体腔内に放出しアノフェレスの唾液線に侵入する様子を示した．

マラリア原虫の生活史に一通り触れた上で，「恐るべきマラリア原虫をもつたアノフェレスは人の血を求めて飛びたつていく」という字幕が映される（07:40）．そして，「さればこそマラリアを翼もつ熱病と呼ぶ」と字幕が映し出された画面の背後で，（マラリア原虫をもった）アノフェレスが彦根の街を飛び立つ姿を表現した．本映画に「翼もつ熱病」というタイトルが付された意味をここで初めて知らされることになる．

3）対策の実施（08:11～50:08）

この章は，彦根市で実際に展開されるマラリア対策の様子を記録しており，前章が“学術編”であったとすれば，本章は現実の取り組みに目を向けた“実践編”といえる．まずマラリア対策を順調に遂行するための土台づくりとして彦根市における行政組織の改編を説明し，本対策の主軸として新設された「衛生課」にスポットを当てた（09:06）．その後，1949（昭24）年3月に制定された「彦根市マラリア豫防條例」について，その条文が毛筆で記された冊子を1ページずつ捲る形で内容を説明している（09:43）．

その後，彦根市のマラリア対策を「I 衛生教育，II 原虫処置，III 蚊族処置」という3つの柱で推進することを示し（10:22），それぞれ順に実際の様子を映しながら解説した．「衛生教育」に関する箇所（10:27）では，リーフレットやポスター，新聞記事などによる啓発活動や「マラリア展」の開催，人形劇によるマラリア予防教育の様子などが示された．人形劇には子どもだけでなく多くの大人が集い鑑賞する光景が映し出されている．「原虫処置」に関する箇所（13:06）では，小学校における集団採血の模様や固定染色したスライドガラス上の血液を顕微鏡で検査する（原虫検査）様子が示され，また医師が患者の脾臓部分を触診する姿やキニーネなどの薬品が映し出された．ここまで「衛生教育」と「原虫処置」で併せて約5分30秒の時間を割いたのに対し，3つ目の「蚊族処置」については約35分という長時間を費やした．「蚊族処置」（15:57）は，大きく「A. 応急処置」と「B. 恒久処置」の2つに分類されることを示した上でそれぞれ順に解説した．「応急処置」（18:12）の解説として重点が置かれたのはDDTなどの薬剤撒布である．「パワースプレイヤー」

や「肩掛噴霧器」などの機材が映し出されたあと，作業員がこれらを使用して映画館内や家屋の脇を通る水路，雑草の茂みなどに薬剤を撒布して歩く様子が記録された．また，薬剤撒布だけでなく除草や湿地整理なども「応急処置」の方法として紹介されている．一方，「恒久処置」（30:26）として最も多くの時間が割かれた取り組みは，彦根城「外濠」などを埋め立てる作業である．リヤカーやトラックの荷台に積み込まれた塵芥を鍬でかき出し，アノフェレスの発生源となる不要な水面を埋め立てる様子が長時間にわたって映し出された．協力して作業に取り組む人びとの中には女性や制服を着た学童の姿も確認され，また，雪が降り積もるなかでの埋立て作業の様子も記録されていた．

4）終わり（まとめ）（50:08～50:34）

全体の締めくくりとなる本章は，「大彦根市」，「建設のために」，「マラリア予防撲滅」という白抜きの文字が順に映し出される．その後，下から見上げるようにして彦根城の天守閣が映し出された後，「完」という文字で幕を閉じた．

Ⅳ．考　察

1．映画「翼もつ熱病」の製作と活用

風土病としてマラリアが身近に存在した彦根市の人びとは，それが生命に直接影響を及ぼすような脅威でないことを経験的に知っており，「2，3日おこりをふるわんと夏が越せない」と口にするほど安易に考える傾向にあった．こうした住民の軽薄な意識を改め，正しい予防と治療を促すための衛生教育が様ざまな方法で実施された．また正確な知識の普及に留まらず，「衛生課が計画し実施せんとするマラリア対策を充分理解させてこの大事業に協力してもらう」ことをも意図していた[9]．そのための1つのツールとして映画「翼もつ熱病」は製作され，“教育的な”役割を期待された．

当時の日本は，教育を目的とする映画の製作・上映が飛躍的に前進した時期である．これはGHQ/SCAP（General Headquarters, Supreme Commander for the Allied Powers：連合国最高司令官総司令部）が占領政策において日本の民主化を促進するための啓蒙手段として映画を重要視し，それによって日本側の制度・組織が整備・拡充されていったことと深く関係している[10]．GHQ/SCAPの民間情報教育局（Civil Information and Education Section，以下CIE）は，文部省（当時）に対して大量の映写機や幻灯機，フィルムなどを無料貸与し，それを各都道府県に配分・上映させることで全国的な社会教育活動を展開した．このとき貸与された米国製16ミリトーキー映写機（National Company社製）は「ナトコ」と呼ばれ，またフィルムは「CIE映画」あるいは「CIE教育映画」と呼ばれた[11,12]．「翼もつ熱病」は，彦根マラリア研究所と彦根市衛生課が共同で製作した自主製作映画であり，GHQ/SCAP/CIEによる民主化促進プログラムと直接関係するものではない．しかし，戦前から存在する教育映画が戦後の占領政策を契機として全国的にひろがり発展するなかで企画・製作された本映画は，少なからずこうした情勢の影響を受けたものと想像できる[13]．

「翼もつ熱病」が彦根市民にはじめて公開されたのは，1950（昭25）年5月20日のことである．彦根市は，毎年春または夏に全市民を対象とするマラリア予防教育の一環として「マラリア撲滅強調週間」を開催した．対策2年目にあたる1950年に実施した「第2回マラリア撲滅強調週間」（5月18日～22日）の目玉が「翼もつ熱病」の初上映（同20日（土）午後7時半より，彦根映画劇場）だった[14]．「翼もつ熱病」は，その後も衛生教育教材として市内各地で巡回上映された．市広報「市民の友」（昭和25年8月10日記事）によれば，「映画と講演の夕」と銘打って同年7月29日から8月18日までの約3週間に市内各地の幼稚園や小学校，寺，公民館を会場とする計14回の上映が企画された．上映の前には人形芝居や衛生講話が実施され，これらが1つのまとまりとなってマラリア予防教育が展開されている[15]．

「衛生課主催の「講演と映畫の夕」は私達にとつて一番わかりやすく然も面白き衛生教育で幾多の智識を体得致しました．特に學術記録映畫「翼もつ熱病」を見てマラリアが急性傳染病で如何に恐ろしきものか今更ながら認識すると共に衛生班

員の方々に感謝致し，私達市民も共に協力して住みよい街衛生の街をつくりたいと思います.」[16]

市広報「市民の友」（昭和25年9月10日）には「映画と講演の夕」が大盛会のうちに終わったことを伝える記事が掲載され，「一市民談」として以上のように参加者の声を記した．彦根市役所発行の広報という資料の性格上，この記事では成果をやや誇張して表現したともとれるが，視覚に直接訴える「映像」を通じての衛生教育は市民の目に大変新鮮に映ったものと思われる．また，そこに映し出される情景や人物が市民にとって馴染み深いものであることは，自分たちが共有する身近な健康問題としてマラリアを再考する機会となったに違いない．

図2　映画完成後の出来事が映し出される例

右側の垂れ幕に記された「第四回マラリア撲滅強調週間」は1952（昭27）年4月29日より開催された企画である（12分27秒の映像）。

2. 映像に見られる再編集の跡

彦根市立図書館書庫より発見された本映画フィルムには既述の通り，映写途中で停止したために発生した焼け跡や映写時のトラブルによって生じたフィルム送り用穴（パーフォレーション）の破損が複数確認された．また，基本的に白黒フィルムであるものの部分的に手法による着色が施された箇所を確認できることから，当時映写に使用されたフィルムそのものであると判断することができる．しかしながら，そこに映し出される内容にはやや不可解な点がある．時系列で考えて，本映画が完成した1950（昭25）年よりも後の出来事の映像が複数の箇所で確認されるのである．例えば，12分27秒から「第四回マラリア撲滅強調週間」と「保健衛生文化展覧會」と書かれた垂れ幕を下から見上げる場面がある（図2）．第4回マラリア撲滅強調週間は1952（昭27）年4月29日より開催された企画で[14]，「翼もつ熱病」が初上映された時点から数えて約2年後の出来事である．この第4回マラリア撲滅強調週間は前年1951（昭26）年11月，近畿地方を巡幸中の昭和天皇が彦根市を訪問した際に小林弘が行った御前講演や同年12月の第3回保健文化賞受賞（第一生命保険相互会社主催）を記念して，「衛生課の総力をあげて挙行」[14]された．12分53秒から「記念」「保健文化賞受賞」「天皇御前講演」という文字の下に賞状や写真が展示された様子が映し出されるが，これは第4回マラリア撲滅強調週間での催しの一場面と推測される．なぜ，このようにして製作時点よりも後の映像が所どころに含まれているのか．

これらはのちに再編集がなされた形跡である．小林弘は「彦根市に於けるマラリア防遏」（私家版，1960年）のなかで「翼もつ熱病」の製作について触れ，「はじめ紹介編，学術編，対策編，実施編とに区別したが，何回か再編集して現在は前編「マラリアについての学術的記録」，後編に主として「対蚊族処置の記録」を収めて全巻とし約1300呎である」[17]と記している．本研究で分析対象とした映画フィルムの長さが1,225フィートであったことは，小林弘がここで記した内容とおおよそ合致する．また，われわれはⅢ. 結果で記したように映画の内容から4部構成であることを明らかにしたが，いずれも明確な章立てによって区分されていたわけではない．本研究によって「1）始まり（導入）」と「2）学術的内容」に区別した部分をひとかたまり，「3）対策の実施」と「4）終わり（まとめ）」をもう一つのかたまりと解釈すれば，ここで小林弘が記したように前編を「マラリアについての学術的記録」，後編を主として「対蚊族処置の記録」という大きく2部で構成されているとも判断できる．映画フィルムには切断跡をセロハンテープで継いだ箇所が確認でき，こ

れらも再編集の形跡とみなすことができる．

3. 映画「翼もつ熱病」が担った役割の変容：「教育映画」から「記録映画」へ

映画「翼もつ熱病」は，「何回か再編集」されて現在の状態に至った．現在確認できる映像は1950（昭25）年に完成したフィルムを基盤としながらも，あるシーンが削除されたり，追加されたり，あるいは並び替えられたりした結果である．したがって，われわれは初公開された時点での（再編集以前の）映像を観ることができない．当時の彦根市民が実際に目にした「翼もつ熱病」そのものを観る術を持たないのである．

しかしながら，再編集以前の内容を知る手がかりとなる1つの文書史料が存在する．既に述べたように，「翼もつ熱病」は無声映画である[18]．そのため，マラリア予防教育用の教材として上映する際には映写するだけでなく映し出された画面の内容を口頭で説明する必要があった．その「手引き」とも言うべきスクリプト（台本）が長崎大学熱帯医学研究所に所蔵されていた[19]．本史料[20]は，全26頁からなるB5判の冊子で表紙には「學術記録映畫」「翼もつ熱病」「昭和25年」「彦根市」と明記されている．奥付の記載によると「昭和25年5月20日発行」であり，これは映画「翼もつ熱病」が初公開された日付と一致する．著作者は「彦根マラリア研究所」，発行所は「彦根市衛生課」と記されていた．台本となるページは縦に二分され，左側の「A画面」と記された列には映し出される内容（映像，字幕）が，右側の「B解説」の列にはその説明が記されている．それぞれの記述には上から順に番号が付されており両者は対応している．上映の際，映像の進行（A画面）にあわせて，それに応じた説明（B解説）を読み上げることで市民の理解を促したものと思われる．

既述の通り，われわれは再編集される以前の「翼もつ熱病」を観ることはできないが，このスクリプト（台本）と現在手にしている映画の内容を比較検証することで，小林弘がのちに再編集した箇所をある程度特定することが可能となる．

再編集によって新たに映像が「追加」された箇所を抽出すると，その内容から大きく2つに分類することができた．1つは「3）対策の実施」のはじめ部分に映し出される衛生教育の様子を撮影した場面（10:27～13:06），もう1つは同様に「3）対策の実施」の後半部分に映し出される蚊族処置（恒久処置）の実際を撮影した場面（33:30～50:08）である．特に，後者については約17分間にもおよぶ新たな映像が加えられており，具体的には対策2年目にあたる1950（昭25）年度の「外馬場外濠排水埋立工事」，1951（昭26）年度の「水流町外濠排水埋立工事」「松原町大水溝埋立工事」，1952（昭27）年度・1953（昭28）年度の「城山裏大濕地埋立工事」の現場の様子が新規追加された．これらは，「2）学術的内容」に収録されたような“教育的な”性格をもつ内容とは異なり，むしろ彦根市が取り組むマラリア対策の実際を“記録として”収めることを意図して追加された映像といえる．

「翼もつ熱病」は彦根市民を対象とするマラリア予防教育に用いるために，対策がまさに進められるなかで撮影・製作された映画である．したがって，現実的に，作業に長い時間を要する土木事業（外濠などの埋め立て）の様子を，はじめの製作の段階で収録できなかったという事情があろう．映画の完成・公開後も埋め立て工事の実際を綿密に撮影し，のちにこうして映像を追加した小林弘には対策の様子をドキュメンタリーという形で残したいという考えがあったものと推測される．結果として，当初「教育映画」としての役割を期待され製作された「翼もつ熱病」は，対策2年目以降の具体的な対策記録の“継ぎ足し”によって「記録映画」としての性格を色濃くしていった．

小林弘によれば[17]，「翼もつ熱病」は彦根市民を対象に上映されたばかりでなく，1950（昭25）年12月には国立公衆衛生院（現，国立保健医療科学院）にて，「昭和26年には大阪高槻大学での衛生動物学会で」[21]上映され，さらに1957（昭32）年8月には，「厚生省を通じて沖縄のマラリア防遏の教育宣伝のために沖縄米軍より依頼があつたから，借して（原文ママ）ほしいとの事にて

「翼もつ熱病」を半年間沖縄にかした」と記している．また，1958（昭33）年秋にはカリフォルニア大学教授からの依頼に応じ，同大学にフィルムを送付して「わが国のマラリア防遏として紹介」[17]された．このように，彦根市民だけでなくより多くの人びとの前での上映の経験が，“あらゆる人びと”を鑑賞者として想定した「記録映画」へと変容させる一因となったことが推測される．

4. 対策推進における占領軍の存在

国立国会図書館憲政資料室に所蔵されるGHQ/SCAP文書のうち公衆衛生福祉局（Public Health and Welfare Section，以下PHW）の記録文書のなかに，公衆衛生福祉局長C.F.サムスが1951（昭26）年3月6日付で小林弘に宛てた書簡が存在する（宛名が“Dr. Hiroshi Kobayashi”と記載されているが，これは「弘」の読み方を誤ったものである）[22]．この文書は，同年2月17日付で小林弘が送付した手紙およびリーフレットを受け取ったサムスが，その返信として送ったものである．そこには以下のような文章が綴られている．

> “The work accomplished by you and your staff during the past year in malaria control is very encouraging. You have set an excellent example to other prefectural sanitation organizations. However, preventive medicine practices in malaria control cannot be neglected without danger of recurrence in an endemic area such as Shiga. The ultimate success of the malaria control program will depend upon continuous efforts of all personnel concerned until the disease is eradicated.
>
> I thank you for your interesting letters and the attached information.”

小林弘が送付した手紙の内容は未だ確認できていないが，以上の文面から彦根市の取り組みをサムスが高く評価していたことがわかる．このやりとりは，市広報「市民の友」（1951（昭26）年4月10日記事）にて「連合軍より彦根市のマラリア撲滅事業を激賞」という見出しで大きく取り上げられるとともに，「三月二十二日より厚生省主催の全國都道府縣代表環境衞生係官の講習會が開催された際にGHQ衞生技師yマクラレン氏及び厚生省須川環境衞生か長の推薦により彦根市のマラリア學術記録映画「翼もつ熱病」を特別上映し（原文ママ）」[23]たことが市民に伝えられた．以上の内容からも，彦根市のマラリア対策は占領軍との関係において展開された側面をもつことが理解できる．

映画「翼もつ熱病」のスクリプト（台本）には，製作の背景や映画内容の概略，製作関係者について英語で記された頁がある．これらは占領軍の存在を意識して作成されたものと思われる．また，スクリプトの記述内容によれば，初公開時点での本映画には占領軍（滋賀県民事部）主催による講習会の様子が収録されていたことを確認できる[24]．ところが，小林弘によるのちの再編集によってこうした映像は「削除」されており，現在，われわれが手にしている映像を観る限り，彼ら占領軍の存在を窺い知ることはできない．以上のことから，次のような点を指摘することができる．

彦根市のマラリア対策を指揮した小林弘はその推進にあたって占領軍の存在に留意し市が懸命に取り組む姿を示すとともに，彦根市民に対しては映像などを通じ占領軍の存在を知らせることで対策推進の根拠とし，後ろ盾とした．一方，対策の「記録」としては映像から占領軍の存在を意図的に排除することによって，マラリアの撲滅が市の功績であることを前面に押し出したものと推測できる．

V．まとめ

われわれはこれまでに，第二次大戦後の滋賀県彦根市で取り組まれた土着マラリア（おこり）対策の全体像を明らかにしてきた．本稿では，彦根市がマラリア予防教育用の教材として製作・活用した映画「翼もつ熱病」の内容を検討し，その特徴を考察した．以下にその概略をまとめる．

(1) 映画「翼もつ熱病」のフィルム（16ミリ）は，彦根市立図書館の書庫より木箱に収められた

状態で発見された．フィルムは374メートル（1,225フィート）からなり，収録時間は16コマ／秒再生で約51分である．音声は入っていない．白黒フィルムである（部分的に着色あり）．

(2) 彦根市衛生課と彦根マラリア研究所が共同で製作した自主製作映画である．1949（昭24）年5月から撮影が開始され，1年後の1950（昭25）年5月20日に初公開された．

(3) 映画の内容は大きく，「1）始まり（導入）」（約2分間），「2）学術的内容」（約6分間），「3）対策の実施」（約42分間），「4）終わり（まとめ）」（約30秒間）の4部で構成されていた．

(4)「3）対策の実施」のなかでも媒介蚊 *Anopheles* の発生を防ぐための土木事業の記録に多くの時間を割いていた（約20分間）．

(5) 市内の小学校や公民館，寺などを会場として巡回上映された．

映画「翼もつ熱病」は，小林弘によってのちに数度の再編集が施された．当初「教育映画」としての役割を期待され製作された本映画は，再編集によって「記録映画」としての性格を色濃くしていった．また，本対策は占領軍との関係のなかで進められた側面をもつが，のちの再編集により占領軍の存在は「記録」から削除された．マラリア撲滅が市の功績であることを前面に押し出す意図があったものと推測される．

謝　辞

本研究は，日本学術振興会科学研究費　若手研究（B）「占領期日本の学校における感染症対策に関する実証的研究」（研究代表者：田中誠二），基盤研究（C）「占領期の保健医療政策に関する研究　GHQ文書内の相互リンク化による検証」（研究代表者：杉田聡，研究分担者：田中誠二）の成果の一部である．本研究を進めるにあたり，聞き取りや史料に関する情報提供をいただいた小堀弘氏，野村三四子氏に深謝申し上げる．最後に，彦根市立図書館，株式会社　東京光音の皆様に厚く御礼を申し上げる．

注記および文献

1）山崎修道他編．感染症予防必携．東京：日本公衆衛生協会；2005．p. 371–376

2）田中誠二，杉田聡，丸井英二．戦後占領期におけるマラリア流行の2類型．日本衛生学雑誌 2009；64(1): 3–13　本論文では第二次大戦後，わが国に進駐したGHQ/SCAP（連合国最高司令官総司令部）が記録していた感染症統計（国立国会図書館憲政資料室に所蔵）を復刻・整理し，占領期日本におけるマラリアの流行を考察した．当時の日本には，(1) 輸入マラリア（imported malaria）と (2) 土着マラリア（indigenous malaria）の2類型が存在したことを明らかにし，その過程でわが国に古くから存在した土着マラリアについて複数の史料に基づき検討した．

3）田中誠二，杉田聡，安藤敬子，丸井英二．風土病マラリアはいかに撲滅されたか―第二次大戦後の滋賀県彦根市―．日本医史学雑誌 2009；55(1): 15–30

4）木箱には「翼もつ熱病」のフィルムの他に，「天皇と彦根」というタイトルの映画フィルム1本と空リール1本が収められていた．

5）阿部彰．人間形成と学習環境に関する映画史料情報集成．東京：風間書房；1993

6）3)「文字情報」について，一般的に字幕は無地の背景に文字が記されてある「字幕」と映像上に文字が重ねられている「字幕スーパー」に大別されるが，本研究ではこれらを特に区別せず記録することとした．被写体そのものに文字が付された場合も同様に文字情報として記録した．

7）小林弘．彦根市のマラリア対策．滋賀：彦根市衛生課；1952．p. 135–137

また小林弘は「彦根市に於けるマラリア防遏」（私家版；1960）のなかで，「企画脚本，撮影，編集共すべて私が担当し，田中，出口，西川，尾本課員がこれに主として協力した」（p. 161）と記している．既述の通り，彦根市立図書館書庫より発見された本フィルムは木箱に収められた状態で保存されていた．木箱の表面には「滋賀縣彦根市本町　彦根市役所衛生課御中」と記され，左下部には「小西六写真工業株式会社」（現 コニカミノルタホールディングス株式会社）と記された印判が押されている．現像作業は「小西六写真工業株式会社」に依頼され，作業後に彦根市衛生課へ送付された可能性がある．

8）森下薫（1896–1978）はわが国におけるマラリア研究の権威である．1923（大12）年，北里研究所に入所，翌年1924（大13）年に台湾総督府中央研究所衛生部に入り，のちに台北帝国大学教授となってマラリア研究を進めた（飯島渉．マラリアと帝国―植民地医学と東アジアの広域秩序―．東京：東京大学出版会；2005．p. 49–51）．戦後は，大阪大学微生物病研究所教授に就任し，1949（昭24）年，彦根市より委嘱を受

け「彦根マラリア研究所顧問」として対策に関わった（田中前掲書（3））．

9）小林弘．彦根市に於けるマラリア防遏．私家版；1960．p.157

10）田中純一郎．日本教育映画発達史．東京：蝸牛社；1979．p.169–175

11）阿部前掲書（5）．p.139–161

12）阿部彰．戦後地方教育制度成立過程の研究．東京：風間書房；1993．p.685–742

13）佐藤によれば，教育映画は1925（大14）年ごろから製作が盛んになり，文部省が自ら製作したほか，82社の製作会社が存在した．また，1939（昭14）年に施行された「映画法」によって劇映画には文化映画と呼ばれる短篇記録映画の併映が義務づけられ，教育映画を含む記録映画業界はこれにより一気に拡大した（佐藤忠男．日本映画史 第2巻．東京：岩波書店；1995）．これらは，戦前の日本において教育映画が社会教育手段として（ある程度）確立していたことを示すものである．敗戦後，「映画法」の廃止によって文化映画の併映は義務でなくなったが，GHQ/SCAP/CIEによるCIE映画プロジェクトによって，映画を活用した教育実践はさらに大きく，具体的に，全国的に浸透していったものと考えられる．（なお，CIE映画については土屋による以下の論文において詳細な検討がなされている．土屋由香．アメリカ対日占領軍「CIE映画」―教育とプロパガンダの境界―（1）アメリカ対外文化戦略としての教育映画．愛媛法学会雑誌2004；31（1・2）：109–142／（2・完）日本人による受容と解釈．愛媛大学法文学部論集 総合政策学科編2005；（19）：27–54） また，滋賀は衛生教育において映画や幻灯を利用することの意義を論じるとともに，使用することのできる衛生教育映画・幻灯フィルムを一覧にまとめている（滋賀秀俊．公衆衛生教育便覧．東京：公衆衛生社；1953．p.95–122）．衛生教育に限ってみてもその媒体として映画の製作・活用が進展したことを窺える．

14）小林前掲書（9）．p.158–161

本資料の記述では，第2回マラリア撲滅強調週間が「昭和25年6月18日から同22日まで」開催されたこととなっているが，市広報「市民の友」に掲載された記事や当時の記録写真との照合から，正しくは「昭和25年5月18日から同22日まで」であることが確認できる．なお，前年1949（昭24）年10月に県下指定市町村の衛生関係者を対象とする蚊族駆除の講習会（滋賀民事部主催）が彦根市で開催された際に，「翼もつ熱病」の一部上映がなされたとの記述がある（小林前掲書（7）．p.132–133）．

15）彦根市役所．市民の友（昭和25年8月10日発行，第21號）．彦根市広報

16）彦根市役所．市民の友（昭和25年9月10日発行，第23號）．彦根市広報

17）小林前掲書（9）．p.161–162

18）「翼もつ熱病」が無声映画であることについて，小林弘は「経費の点でトーキーとする事が出来なかつた」と記している（彦根マラリア研究所．翼もつ熱病．滋賀：彦根市衛生課；1950．p.1）．

19）小林弘は長崎医科大学の出身であり，また長崎大学風土病研究所（現，熱帯医学研究所）大森南三郎教授のもとで博士号を取得したことから，本資料は彼によって寄贈されたものと推測される．

20）彦根マラリア研究所．翼もつ熱病．滋賀：彦根市衛生課；1950.

21）「大阪高槻大学」という名称の大学は実在しない．大阪府高槻市に所在する大阪医科大学を指すものと思われるが，1951（昭26）年に開催された日本衛生動物学会近畿支部第4回例会は大阪市で開催されている（会長は大阪大学・森下薫教授）．前年の1950（昭25）年には高槻市で開催されていることから，小林によるこの記述は学会の開催時期あるいは開催地のいずれかを誤って表記した可能性が大きい．以上の情報は，日本衛生動物学会の桐木雅史先生（獨協医科大学），矢野泰弘先生（福井大学）よりご教示いただいた．

22）国立国会図書館 GHQ/SCAP RECORDS. Daily Journal（9 March 1951）, PHW Sheet 03716

23）彦根市役所．市民の友（昭和26年4月10日発行，第37號）．彦根市広報

24）彦根マラリア研究所前掲書（20），p.19 スクリプトには映し出される画面の説明として「7（民事部主催，衞生講習会―）」「8 ホーマー氏の講演」との記載がある．これは，注（14）に記した1949（昭24）年10月に彦根市で開催された講習会（滋賀民事部主催）を撮影したものと推測される（小林前掲書（6）．p.133，講習会の内容に「ホーマ氏講演」と記されている）．

Malaria Preventive Educational Film "Tsubasa motsu netsubyo" and Its Changes: Malaria Control Program in Postwar Hikone

Seiji TANAKA[1)], Satoru SUGITA[2)] and Eiji MARUI[3)]

[1)]Institute of Humanities, Social Science and Education, Niigata University
[2)]Faculty of Medicine, Oita University
[3)]Faculty of Human Sciences, University of Human Arts and Sciences

Following the end of World War II, the city of Hikone in Shiga Prefecture engaged in measures against endemic malaria. The film "Tsubasa motsu netsubyo" is a visual aid that was jointly created by the Department of Health of Hikone City and the Hikone Malaria Research Institute for use in malaria prevention education for citizens. In the present study, we created a DVD version of the original film that was found in the stacks of the Hikone Municipal Library and investigated the structure and characteristics of the film contents. The film contents were broadly classified into four parts as follows: 1) Introduction, 2) Academic contents, 3) Implementation of measures, and 4) Conclusion. The film was later edited multiple times by Hiromu Kobayashi (Head of the Department of Health of Hikone City), resulting in a change in the type of film from an "educational film" to a "documentary film". This eradication campaign was carried out with close relations with Occupation Forces, but their existence in the movie was deleted by editing it later. It is suspected that Kobayashi intended to emphasize that the eradication of malaria was the city's achievement.

Key words: indigenous malaria, malaria eradication campaign, health education, educational film